

陳啓修、東京におけるその文学的営為

——日本留学から北京大学教授に——

【陳啓修覚書き(一)】

芦田肇

芥川龍之介が前門の北京駅に降り立ったのは一九二一年六月十二日のことであった。⁽¹⁾

その年の三月、芥川は大阪毎日新聞社の海外視察員として中国に赴き、上海を振り出しに、杭州、蘇州、揚州、南京、蕪湖、九江、廬山、漢口、長沙などを訪れる。龍之介の三ヶ月余りにわたる中国の旅は、北京でその最終段階を迎えようとしていた。中国の「王城の地」、すなわち首都の北京は龍之介をいたく魅了したようである。⁽²⁾ 彼は北京に一ヶ月余り滞在する。芥川が「薨の黄色い紫禁城を繞つた合歡や槐の大森林、——誰だ、この森林を都會だなどと言ふのは？」⁽³⁾と記したのはこの時である。

この北京滞在中に芥川龍之介は胡適に会う。胡適は時に三十一歳、奇しくも龍之介とは同年齢であった。「文学革命」の口火を切ったあの「文學改良芻議」の発表からすでに四年の歳月を経て、この間の多方面にわたる数々の業績や発言が、北京大学教授・胡適の名声を確固不動のものにしつつあった。胡適は龍之介にとって、彼の中国旅行の中で、好印象を残した忘れえぬ中国知識人の一人でもあった。⁽⁴⁾

陳啓修、東京におけるその文学的営為

胡適は芥川に会ったことをその日記に記している。一九二一年六月二十五日の日記には「今日午前中、芥川龍之介氏が話しに来る。彼は今年三十一歳で、日本で最も年少の文人の一人だと自ら言った。彼の容貌は中国人によく似ており、今日は中国服を着ているため、なおさら中国人にそっくりだ。この人は日本の悪い習性がないようだし、話(英語で)もなかなかのものだ。」⁽⁵⁾とあり、胡適も龍之介に初対面で好印象を持ち、互いの対話が英語で交わされたことなどがわかる。さらにその二日後、六月二十七日の日記には「八時、扶桑館に行き、芥川氏から食事を馳走になる。同席したのは惺農と三、四人の日本の新聞界の人々である。これは私が日本式で日本料理を食べた初めてであり、靴を脱いだり、胡座をかいて畳に坐るといふかの行儀作法もなかなか趣きがあった。……(以下略)」⁽⁶⁾とあり、その後段部分には、中国の旧劇の改良問題について語ったこと、芥川が胡適の詩を口語で訳したいと語ったこと、また作家の表現・出版の自由をめぐる問題などで互いの意見を交換したことなどを記している。

さて筆者が注目したいのは、北京滞在中の龍之介の事跡でもなく、また龍之介が会った胡適のことでもない。またさらには扶桑館の食事の席で、二人の間に交わされた会話の具体的内容についての条くわじりやその評価でもない。「胡適日記」の六月二十七日の項で、食事の席に「同坐的有惺農」(原文)と記されている「惺農」なる人物である。

「惺農」とはいったい誰なのか。

この「惺農」の名は、「胡適日記」の別の箇所にも登場する。例えば、胡適が龍之介に会うほぼ一ヶ月前、一九二一年五月十日の日記には「陳惺農に招かれて中央公園で昼食をとり、呉又陵(虞)氏に会う。この人、十年前の過激分子で、成都では容れられなかったが、後に『新青年』が出版され、守旧的な空気がいささか変化したので、漸く人に受け入れられるようになった。……(中略)……今回、北京大学で国文を教えてもらうために彼を招聘した。今日が

初対面。」⁽⁷⁾とあり、ここには「惺農」の姓が「陳」であることも記されている。さらに同年五月七日の日記にも「……陳惺農氏（啟修）に夕飯に招かれる。客は早稲田大学教授の内ヶ崎作三郎（S. Uchigasaki）。吉野作造（Yoshino）教授の紹介状を持ち、我々に彼と話をしてくれということだった。この御仁、かなり英語に通じており、人類学を滔々としやべるが、実際のところは極めて理解が浅い。彼はまた『中日互助』を大いに語ったが、実際不愉快で聴いておられず、一言二言話しただけだった。……（以下略）」⁽⁸⁾とあって、ここでは陳惺農が陳啟修とも記され、彼が胡適と内ヶ崎作三郎⁽⁹⁾との会見の場に同席していたことがわかる。

この陳惺農、あるいは陳啟修とは一体いかなる人物なのであろう。なぜ胡適と芥川や内ヶ崎との会見の場に彼が同席していたのであろうか。

「胡適日記」とは別の材料から、この陳惺農（陳啟修）なる人物をもう少し追ってみよう。

『北京大學日刊』によれば、一九二二年十月四日、北京大學第三院の大講堂で、東京商科大学教授・法学博士福田徳三⁽¹⁰⁾の「馬克斯主義的根本思想特別注重其與布爾塞維克之關係（マルクス主義の根本思想、特にそのボルシェビキとの關係を重視して）」と題する講演が行われている。講演内容についてはここでは割愛するが、この講演会で通訳を担当したのが陳惺農（陳啟修）であり、彼が北京大学の教授であることを確認できる。⁽¹¹⁾

同様に、一九二五年十一月二十七日、やはり北京大學第二院の大講堂で、法律学系、政治学系教授会の主催による植原悦二郎⁽¹²⁾の「日本之政黨及政府（日本の政党及び政府）」と題する公開講演が行われているが、これも通訳は北京大學教授・陳啟修が担当している。⁽¹³⁾

つまり二十年代の前半、北京大學を訪れた日本人の経済学者・政治学者が公開講演を行った際に、北京大學教授の

陳啓修が何度か公式に通訳を担当している事実を確認することができる。そしてそのことから、彼の日本語の能力がかなりの水準にあったことが推し量れよう。

これらの事実から推測されることは、一九二一年六月二十七日に、龍之介と胡適が北京の扶桑館で会見した際に、惺農、すなわち陳啓修がその場に居合わせたのは、主として日本語の通訳として同席したことが考えられる。内ヶ崎との会見の際も然りである。芥川と陳啓修とがすでに知己の間柄だったことは考えにくい。とすれば、胡適が記すように、彼と龍之介の間の直接の対話が英語で行われたとしても、突っこんだ、あるいは微妙な問題については、龍之介にしても胡適にしても、中国語と日本語を共にかなりの程度に解する通訳がどうしても必要だったのではないだろうか。日本の著名な文人芥川龍之介と会うに際して、胡適が北京大学の同僚であり、かつ日本語に精通した陳啓修に同席を望んだであろうことは納得がいく。陳啓修の同席は、両者の間の通訳の任を担うためであったことは疑いない。

すなわち、胡適と芥川龍之介の会見の場に同席した「惺農」とは、当時北京大学教授だった陳啓修にはかならない。啓修は原名、惺農は字である。⁽¹⁴⁾

事実をやや先取りして記せば、この時、陳啓修は着任して三年目になろうとしていた北京大学教授であり、さらには政治学系教授会の系主任（学部長）でもあった。⁽¹⁵⁾そして胡適の方は、北京大学の教務長代理の任にあった。すなわち二人は、同じ北京大学に籍を置く教員同僚であるばかりでなく、先に「胡適日記」に見た如く、時に北京の中央公園で食事を共にし、また必要な場合には胡適のために日本語の通訳を務めたり、あるいは教務長代理と系主任の關係として、大学の教務会議や各種委員会の場などで同席して言葉を交わす機会の多い、公私両面に渉るかなり昵懇の間

柄にあったといつてよい。

さて、断るまでもないが、胡適と芥川の会見の場に同席していた「惺農」が、当時北京大学教授だった陳啓修であることが確認できたことを以て、能事終われりとするつもりもない。これは本稿の発端・糸口にすぎない。

さらに続けたい。

一九二一年の北京から、ここで時と舞台を一九二四年のソビエトの首都・モスクワに移そう。

陳啓修が胡適と芥川の会見に通訳として同席してから、ほぼ三年の歳月が経過している。この時、かの北京大学教授・陳啓修はモスクワに在った。

一九二三年十月八日、陳啓修は北京を発つて欧州に向かう。北京大学の派遣による、ロシア、ドイツなどの視察調査がその目的であつた。陳啓修は北京を発ち、シベリア鉄道でまず最初にロシアの地を踏む。彼は翌一九二四年三月末までモスクワにほぼ五ヶ月間滞在する。その際、陳啓修は二四年一月二十一日に死去したレーニンの葬儀などに参列しており、歴史的な事件に当地で立ちあつてゐることになる。⁽¹⁶⁾

二四年四月の初め、彼はモスクワを離れ、ドイツ、オーストリア、スイス、フランスを巡り、翌二五年の冬に再びモスクワに戻る。

この二度目のモスクワ滞在中に、陳啓修の祖国中国では、あの「五卅運動」が起こつた。

彼は異国の地モスクワで「五卅運動」の消息を聴き、それに強い衝撃を受け、上海民衆の抗議運動の広がりには大きな期待を寄せる。モスクワでは、「五卅運動」と上海をはじめとする中国国内の抗議行動に対して、ソ連労働者を先頭とした義捐金募集活動、ゼネスト支援集会、デモンストレーションが連日様々な場所で大規模に行われる。陳啓修も

それらの集会で登壇して演説を行い、また当時コミンテルン執行委員会議長だったジノーヴィエフが演説した集会にも参加する。彼はそのことについて、モスクワから手紙を書いて北京大学の同僚に次のように伝えた。

……モスクワでは十一、十二の両日、二日間連続の示威運動の演説大会が開かれました。毎日市中の開会場所は数十カ所を下らず、劇場、事務所、あるいは野外で、どこでも必ず二千人以上の聴衆が集まり、当地に在留する中国人で国民革命に賛成の者は、みな彼らにひっぱって行かれて演説するはめになり、中国人が登壇するや、労働者大衆の拍手がいつも数十秒から一分と続くのです。私も三度演説しましたが、一度は野外で演説し、五分間しゃべって声が出なくなったので、適当にお茶を濁して終えたのですが、彼らは満足せず、十数分後には、無理やり私にもう一度話をしろと要求されました。ある連合会場（以前は貴族の俱樂部だったところ）で集会が行われ、ジノーヴィエフが演説を行った際には、二千名余りの聴衆が、ほとんど話の一区切りごとにひとしきり拍手をし、拍手の音が彼の演説のあいだ中、まったく鳴り止まなかったと言ってよいほどでした。というのは、彼が『中国国民の解放の成功は全世界の被圧民族解放の前兆に他ならず、また全世界の真の平和の前兆である』⁽¹⁷⁾ という考えを極めて痛快に余すところなく語ったからです。……

レーニンの死の直前から、ロシア共産党内におけるスターリンとトロツキーの分裂が公然化しつつあった。二四年一月のレーニンの死後、この問題はますます表面化し先鋭化する。当時コミンテルンの執行委員会議長だったジノーヴィエフは当初暫定継承者と目されていた。陳啓修は「五卅運動」に連帯するモスクワでの集会で、そのジノーヴィエフの演説に満腔の拍手を送る。が、ロシア共産党内部でスターリンの台頭と独裁へとつながる権力闘争が陰に陽に進行しつつあったことは、たとえモスクワにあっても彼にとつては想像の域外だった……。

またさらに時と舞台を移そう。時は陳啓修がモスクワから北京に戻って一年半後の一九二七年三月二十日、場所は漢口の血花世界⁽¹⁸⁾にある総理紀念堂。

広東国民政府は、第一次北伐の過程で、国民革命軍が直隸派軍閥・呉佩孚軍との戦闘に勝利して武漢の占領に成功した結果、一九二七年一月一日に国民政府の首都は広東から武漢に移る。遷都から三ヶ月後、漢口では三月十日から十七日まで中国国民党二期三中全会が連日開催され、「中華民國國民政府組織法修正案」、「設立國民政府委員案」など十三の決議案が採択され、三月二十日、武漢国民政府が正式に発足する。

武漢政府の発足に臨んで、「国民革命」が新たな高揚を迎えつつあった時期、まさにその三月二十日、漢口の総理紀念堂は、国民党中央党部、国民政府、国民党湖北省党部、漢口特別市党部などの指導者、及び千余名の各界の来賓で埋め尽くされた。会場正面壇上には孫文の遺像、国民党旗、国旗が掲げられ、場内到るところに夥しい各種の標語・スローガン、対聯が貼られ、革命的雰囲気と熱気が漲る中で、「武漢新聞記者聯合會」の結成大会が開催されようとしていた。

「武漢新聞記者聯合會」は、武漢政府の成立に伴って、「国民革命」をより強固にし、そのいっそう前進をはかるために、「革命宣伝の統一、新聞技術の改善、(革命)輿論の権威の向上、みずからの利益の擁護」を目指し、新聞・通信報道に携わる者が結成した、会員百五名を擁する連合組織であった。

午前十一時、まず総理遺囑を読み上げ、総理遺像と党旗、国旗に向かって「三鞠躬」を行った後、大会開幕の辞を述べたのは、大会の「総主席」に選出された陳啓修であった。⁽¹⁹⁾

この成立大会で、陳啓修は選挙によって九名の執行委員の一人に選ばれ、「擁護中央全體會議恢復黨權」、「質問蔣介

「石摧殘革命輿論」、「歡迎汪主席復職」、「肅清新聞界反動份子」、「通電援助梧州民國日報南昌貫澈日報被封事」などの決議が採択される。⁽²⁰⁾

「武漢新聞記者聯合會」の結成と符節を合わすかのように、翌々日の二十二日から、中国国民党中央執行委員會宣傳部の主宰する国民党中央機關紙『中央日報』が漢口で発刊され、陳啓修はその総編輯に就任する。それは宣伝、報道という文筆を主とする領域の仕事であったが、「国民革命」の推進には不可欠な分野の責任を担うことによって、陳啓修は知識人として革命の第一線に立つことになる……。

またさらに時を一年ほど先に進めよう。季節は一九二八年春四月、舞台は日本の東京王子、飛鳥山公園。

ここでは陳啓修の詩を紹介しておこう。

電車飛跑、塵土撲花、／忽然、女司車叫得急、

——「到了呢、都請下車去！／上飛鳥山公園、休息！」

——「櫻花已開過了、可惜！」／我們只恨、來得太遲。

——「你看！到處落花滿地、／比在樹上、好看幾倍！」

愛花的男女、一對對、／徘徊樹下、和和氣氣、

有的手舞足蹈、粧醉、／醉了、和花片兒同睡。

特地來看花、不滿意、／提起興致、到荒川去。
那裏、有一個游園地、／小小的布置、很有趣。

幾座橋、一池春水、／紅白小艇、穿來浮去。

——「瀑布的聲音！」——「在那裏？」——「少女春衣顏色、眞美！」

此處、我們來得太早、／五色櫻花、還只含苞。

——「過渡到陂上去、瞧瞧、／領略兩岸景緻、也好！」

陂上景緻、眞正不錯、／村在右、江戶川在左、

三岸青草、兩川白波、／遠遠幾道鐵橋、橫過。

望見橋邊櫻花、很多。／——「過渡江戶川去、如何？」

走近一看、老樹婆娑、／枝已半死、花已零落！

整天探花、被花欺騙、／理想中的花、難實現。

好在、有三個人同伴、／邊走邊談、春風滿面。

陳啓修、東京におけるその文学的営為

走到千住、道路窄狭、／摩託車過、捲起塵沙。

一齊説：「坐車回去罷！」／淺草黄昏燈火、如畫。⁽²⁾

（／は原詩改行——筆者）

これは『樂羣（半月刊）』第四期「一九二八年十一月出版」に載った「和東林定湖同游東京郊外」と題する現代詩である。

この詩には執筆期日の記載はないが、先に提示した如く、一九二七年の春、陳啓修は「国民革命」の最前線に立ち、武漢に在ったので、雑誌『樂羣』の掲載時期を勘案すると、この詩に描かれた、つまり飛鳥山公園の花見は一九二八年春のそれということになる。すなわち、この詩が虚構でないとすれば、少なくとも一九二八年四月には、陳啓修は確実に東京に居たことが確認できる。

一九二八年四月の東京、桜の花の満開を過ぎて花散りかけた麗らかな時節、陳啓修が友人の二人と、まずは市電飛鳥山線に乗って飛鳥山公園まで行き、さらに上流の隅田川縁りの荒川遊園に遊び、江戸川、千住と足を延ばし、円タクで浅草の灯を見ながら帰宅の途についた一日の光景が、互いに交わされた言葉をまじえて、あたかも絵を見るように鮮やかに再現されている。詩としての質的なレベルの問題はさておき、東京に在った陳啓修のある一日を浮かびあがらせる興味深い詩である。詩中の一節「理想中的花、難實現」は、彼のそれまでの人生の歩みを含意していると読めなくはない。

もう一首、彼の「飛鳥山花見」とする詩も、短いものなのでここに紹介しておく。

做夢一樣、過了十二年、又來飛鳥山、／山下的王子、遠遠的荒川、都像從前。

兩個白髮看花婆婆、一個唱、一個彈、／我羨慕她們、老了、還能看花學少年。

我剛過四十歲、却是、已經心灰意懶。／回想到十幾年以前、心很決、志很堅、

忽然風波起、革命！革斷了我的心弦！／啊！怎能夠感激生命、重新醉倒花前！⁽²²⁾

先に紹介した詩の中で描かれた同じ飛鳥山の花見で、こちらの詩はその時の自身の心情を詠ったものである。一九一六年、彼がまだ留日学生の頃来たことのある懐かしい飛鳥山公園、今四十を過ぎて、十二年ぶりに再び訪れ、そこから見る風景は以前とすこしも変わっていない。しかし往時の理想に満ちた若い情熱は今はない。自らの理想を託してその第一線に立ち、緊張と感動、焦燥の中で奮闘した「国民革命」は無惨にも潰えさり、張りつめた心は一挙に絶ちきられて、言葉に尽くしがたい挫折の苦汁を嘗めたからである。その挫折の経験からまだ一年も経ていない今、いきとし生けるものすべてに、真から心を動かされることがなくなってしまうた、東京に來た現在の如何ともしがたい沈鬱な心境が滲む……。

だが、それから間もなくこの東京で、陳啓修は自らを文学領域の営為に深く関わらせていくことになる。あたかも文学的営為に全精力注ぐことによって自身の傷心を癒そうとするかのように、そしてあたかも文学そのものがその傷心を癒すものであるかのように。

二十年代に限定した時間的推移に沿って、北京、モスクワ、武漢、東京と舞台を移しながら、北京大学教授・陳啓修の足跡の一端を幾つか取りあげて提示してみたが（これらについては後に再度、より詳しく触れるつもりでいる）、まずは陳啓修という人物の輪郭を大まかに把握する一助にはなろうかと思う。しかしこれとても陳啓修の為人、その事績を明らかにするためのとば口に、漸くにしてほんの少しばかり踏み入れた過ぎない。

陳啓修、中国では実際のところほとんど無名に近い。彼の名と事績は中国において、これまでほとんど人々の関心の対象外に置かれてきた、と言ったほうがむしろ妥当かもしれない。中国で刊行された人名辞典その他に、陳啓修についての項がまったくないわけではないが、それはごく限られた簡単なものでしかない。陳啓修の名が中国でまず取り上げられるのは、敢えて挙げるとすれば、マルクス主義経済学の領域での貢献という面から、原典に依拠して翻訳され、中国で最初に刊行されたマルクス『資本論』第一卷第一分冊（昆侖書店、一九三〇年三月）の訳者として、その領域に限って一定の肯定的な評価を与えられているぐらいではあるまいか。⁽²³⁾

筆者は、先に拙稿「『怒吼罷、中國！』覚書き」で、ロシアのトレチャコフ作『吼えろ支那』の中国での上演の問題を扱った。その中で、最も早く中国語に翻訳紹介された「吼えろ支那」の脚本は、雑誌『舞台戯曲』創刊号所載の大隅俊雄訳「吼えろ支那（九景）」を重訳したものであり、それが『樂羣月刊』第二卷第十號に載った勺水訳「發吼罷、中國！（共九幕）」であること的事实などを指摘した上で、かなりの紙幅を割いて、その訳者である「陳」勺水が、武漢政府の崩壊後、東京に来ていた陳啓修の筆名であること、つまり「發吼罷、中國！」の訳者である勺水とは、陳啓修であることを明らかにした。⁽²⁴⁾

陳勺水が陳啓修であることを明らかにする作業が契機となり、前掲拙稿をまとめあげた後も、彼の文学的営為と人、

あるいはその足跡に興味を感じ、いろいろと調べていく中で、「發吼罷、中國！」の翻訳と中国への紹介などは、陳啓修の東京における文学的営為のほんの一端を示すものでしかなく、今まで埋もれたままにされていた様々な興味深い事実がだんだんに明らかになってきた。筆者がこの陳啓修にあえて注目する契機になったのは、あらましこのような経過からである。

陳啓修には、中国最初の、原典に拠った『資本論』の翻訳刊行に象徴される、生涯にわたる経済・政治・財政学者としての営為がある一方に、中国においてこれまでまったく光が当てられてこなかったと言ってもよい、二〇年代末の東京で行われた（陳）勺水の名による、極めて精力的とも言える一連の文学的営為が存在する。

後に具体的に触れることになろうが、それには、詩論、日本やフランスの詩の翻訳、自身の詩作、日本を主とする世界各国のプロレタリア文学やプロレタリア文学者に関する、評論や紹介文の翻訳、また日本のプロレタリア文学の作品の翻訳などがあり、さらには自身が創作した興味深い内容の小説も数編含まれている。このような広範囲にわたる文学領域の仕事は、二年余りの東京滞在中、もっぱらそのみに掛かり切りの日々を送らなければ到底なしえないと思われるほどの、それは極めて旺盛な、密度の濃い営為であったと言っても過言ではない。

筆者の目標・課題は、東京における陳啓修の一連の文学的営為に全体として光を当て、それを具体的に明らかにした上で、必要な考察を加えることにある。

そのためには、東京での一連の文学的営為を開始する以前の、北京大学時期の陳啓修、あるいは武漢政府時期の陳啓修について、その足跡、業績などを可能かつ必要な範囲で明らかにしておくことが、上記の目標を果すための不可欠な前提作業と考える。本稿は「陳啓修覚書き」(一)として、まず日本留学から北京大学教授の時期における陳啓

修に光を当てるつもりである。

一 日本留学時期

陳啓修 (1886-1960) は、一八八六年四川省中江県に生まれた⁽²⁵⁾。因みに、魯迅より五歳、周作人より一歳若く、郭沫若よりは六歳、張資平より七歳、また茅盾より十歳年上である。

父の陳敦甫は清朝の翰林で、広西の桂林書院山長 (院長) を務めた家柄⁽²⁶⁾を考えると、彼は当時最高の知識階級の環境に生まれ育ったと言えよう。幼少時、彼は中江の私塾で学び、十二才の時に家は四川から広西に移り、桂林でフランス人経営の五年制中学を卒業する⁽²⁷⁾。

一九〇七年、彼が二十一歳の時に来日、翌〇八年、第一高等學校特設豫科第一部 (法科大学及文科大学志望) に入學した。一年間の特設豫科を修了後、東京の第一高等學校英法科での三年間を経て、一三年には東京帝國大学法學部政治學科に入學する、彼、二十七歳の時である。そして一九一七年三月に三十一歳で大学を卒業した⁽²⁸⁾ (この三月に政治學科を陳啓修と共に卒業した者に矢内原忠雄、細川嘉六、賀屋興宣などがいた)。中国で五年制中学を終えた後に来日したため、一般的な学生に較べれば、いわば分別盛りともいう年齢で日本での大学生活を過ごしたことになる。

陳啓修が大学に入學した年には中華民國はすでに成立していた。しかし四年間の大学在籍期間は、中国国内政治の面で、短期間の内には北方軍閥の領袖袁世凱の独裁支配が強まり、第二革命の失敗、袁世凱の大總統就任、中国国民党の非合法化、孫文の亡命、袁の帝政運動、張勳の復辟などが続き、新生の共和国が急速に混迷を深めつつあった時期

でもあった。

他方、『青年雜誌（新青年）』が創刊され、辛亥革命で果たされなかった「思想改造」や「社会改造」をめざす「新文化運動」、「文学革命」が展開されていった時期でもあった。また国際的には、第一次世界大戦の勃発や、日本の「対華二十一ヶ条」の要求が中国に突きつけられたのも、やはり彼の大学在籍中のことである。ロシア（十月）革命は、陳啓修が東京帝國大学を卒業した年、彼が中国に帰国しようとする直前の時期に起った。

吉野作造（彼は陳啓修が属した法学部政治学科教授だった）が「憲政の本義を説いて其有終の美を済す」を書いて『中央公論』に発表したのは一九一六年一月、また河上肇が「貧乏物語」を『大阪朝日新聞』に連載するのはその年九月からであり、陳啓修が大学三年の時だった。彼が日本で大学生活を過ごした時期が、日本のいわゆる大正デモクラシーの時期に重なることも見ておかなくてはなるまい。日本の政治、社会、文化の各方面にあらわれた民主主義的、自由主義的な時代思潮が、分別盛りにあつた彼の学生生活の中で知的関心を呼び起こさなかつたはずはない。

これら内外に生じた歴史的、社会的事件や思想状況は、大学在籍中の彼に、ましてや年齢的にはかなり歳を経て大学生活を送りつつあつた彼に、いわばその歳に見合つた、また中国人としての彼に、中国の現状に見合つた深い影響と反応を与えた可能性を否定することはできない。

東京帝國大學法学部在籍の四年目、すなわち一九一六年十二月に、陳啓修は王兆榮、周昌寿、楊棟林などと共に、東京で丙辰学社（後の中華學藝社）を結成する。彼はその発起人の一人であり、執行部理事に推され、機関誌『學藝』の編輯に携わりながら、自らも政治、経済、法律関連の文章などを執筆してそこに載せた。⁽²⁹⁾

東京帝國大学法学部政治學科卒業の年、すなわち一九一七年三月以降に、陳啓修は実に十年余りにわたつた長い日

本留学に終止符をうち中国に帰国する。その帰国はおそらく、主として北京大学教授に招聘されたからだだったのであろう。その年の末から、憲法、統計学、財政学、現代政治などを担当する北大政治学系教授としての道を歩み始める。⁽³⁰⁾陳啓修が、ほぼ十年余のかなり長期にわたった留日経験と、その中で鍛えられたであろう並々ならぬ日本語の能力を買われて、帰国後に、公私にわたる日本語通訳の機会が頻繁に彼を訪れたであろうことは想像に難くない。冒頭に触れた、陳啓修が通訳として胡適と芥川龍之介の会見の場に同席したのはその一斑にはかならない。

二 北京大学教授・陳啓修

現在哈爾濱商業学校が本校経済学系或は商業科の卒業生二名を求めている。一人は教務主任で一ヶ月の給与は約百二十元、一人は普通教員で、給与は約八十元である。しかしいづれもわかりやすい標準語で話すことができ、また簿記学に通じていることが条件である。上記の条件で就職したいものは、一週間以内に、毎朝六時に南池子葡萄園十八號に来て当方と面談されたし。九、七、一。

右は一九二〇年、北京大学の四年生の学生が卒業を間近に控え、大学が夏期休暇に入ろうとしていた時期に、『北京大學日刊』第六百四十九號（一九二〇年七月二日発行）に載った「陳啓修啓事」である。⁽³¹⁾

大学へ出校前の早朝六時から、自宅での就職面談を行うとは、北京の夏とはいえ何とも早い。陳啓修はこの時すでに北大政治学系の系主任であり、彼が諸事に多忙であったことをうかがわせる。それも含めて、彼本人が書いたこの「啓事」（告示）は、短いものながらも、北京大学教員として多忙を極める中で、懸命に自校の卒業生の就職の面倒を

みようとす、陳啓修の為人の一面を彷彿させてほえましい。

最初に右の「陳啓修啓事」を紹介したのは、乏しい資料の中から、彼の教師ぶりといったものの一端を、まず学生との関係から少しでも具象的におさえておきたかったからである。

陳啓修の教師ぶりを示すものをもう一つ引いておこう。一九二〇年、休み明けの九月に行われた北京大学の始業式で、陳啓修は政治学系を代表する系主任として、学生を前にした挨拶で次のように語っている。学生へ語りかける陳啓修の言葉に暫し耳を傾けよう。

私、現在何も申し上げるべきことはいませんが、政治学系の事柄に關しましてだけは、諸君にいささか關係があると思われまので、この場で一言申し上げておくものであります。／第一に、本学年度から演習を一つ増設して、今後、政治学理に關しまして、教員と学生が頻繁に共同で研究を行う機会を持てるようにしたことあります。第二には、現代政治の講座を増設したことあります。と申しますのは、現代政治の問題は日一日と複雑化しており、たとえば労働政府、パリ講話會議、國際連盟等々、すみやかに研究を必要とするものが少なくないからであります。その上、現在の社会は、いずれにしてもやはり政治から離れることができず、研究を進めたいわけにはいかないというのが實際だからであります。この講座はすでに、陶孟和氏、李守常氏、張慰慈氏、及び私の四人が担当することに決まっております。諸君に手をさしのべて共に研究を行う所存であります。／わが国の青年諸君はこのところ、すでに政治に対して責任ある自覚を有し、實際政治に対しても、ようやくにしていささかの影響を与えるまでになってきておりますが、やはり眞の解決に到っているとは言いがたく、それは学理的な研究がなされていなければならないのであります。眞の解決を圖ろうとするならば、まず共同で研究を行わなければ

なりません。しかしながら全国的な学界規模での共同の研究を行おうとしてもそれは不可能であり、北大の学生諸君との共同研究を願うほかないのであります。他の学系の学生諸君でも、政治を研究してみようという熱意を抱いている方々は、私どもの研究に参加されますことを、切に望むものであります。⁽³³⁾

この挨拶の中で陳啓修が触れている、北京大学政治学系に新設された「現代政治」と称する講座とは、四名の教員が二度の授業時間を使って行う、いわば「総合講座」のような形態のものであった。各担当教員の講義題目は、陶履恭が「勞農政府」、李守常(李大釗)が「現代普選運動」、張慰慈(張祖訓)が「平和會議與平和會條約」であり、わが陳啓修は「中國勞工現況與現代各國勞工組織之比較觀」、及び「現代各國之社會黨」の二講座を担当した。⁽³⁴⁾この新設講座が開かれたのは、あの「五四運動」からすでに一年半余を経た時期であったが、北京大学の学生に対する陳啓修の挨拶と新設講座の講義題目からは、「五四」のまだ冷めやらぬ熱氣、あるいは余蘊とでもいうべきものがうかがわれる。それは「五四」以降に生じた様々な内外政治の動向に、大学のカリキュラムの面からも即応しようとする陳啓修の教員としての意気込みと、学問研究を通して現代政治に影響を与えうる学生を育てることができるといふ確信、そして学生に対する熱い期待が溢れていた。

陳啓修が北京大学に着任したのは一九一七年の後半期と思われる。

ここで、一九一九年から二五年にかけての、陳啓修の北京大学における閲歴を「クロニクル」風に列記しておく。

一九一七年後半期 北京大学に着任、法科教員、法科政治門研究所主任となる。⁽³⁵⁾

一九一九年四月八日 蔡元培校長が召集した「文理兩科の各教授会主任と政治經濟部門の主任會議」に出席。⁽³⁶⁾

同年十月二十五日 北京大学評議会評議員選挙において落選。⁽³⁷⁾

同年十二月九日 北京大学預算委員会委員（圖書担当）、圖書委員会委員に就任。⁽³⁸⁾

一九二〇年三月 「北京大学教職員会」の教員委員補欠に当選。⁽³⁹⁾

同年四月九日 北京大学政治学系教授会系主任に就任。⁽⁴⁰⁾

同年十月十四日 北京大学評議会評議員に当選。⁽⁴¹⁾

同年十月十六日 預算委員会委員、聘任委員会委員、圖書委員会委員に就任。⁽⁴²⁾

一九二一年十一月二日 北京大学評議員評議員選挙で落選。⁽⁴³⁾

同年十一月九日 組織委員会委員、預算委員会委員、聘任委員会委員、圖書委員会委員に就任。⁽⁴⁴⁾

一九二二年四月二十五日 政治学系教授会の系主任に再選。⁽⁴⁵⁾

同年四月二十九日 北京大学教職員臨時代表団第一次會議で、「北京国立専門以上八校教職員代表聯席會議」⁽⁴⁶⁾

（「聯席會議」）に出席する代表の一人に選ばれ、臨時代表團會議の臨時主席に推挙される。⁽⁴⁷⁾

同年十一月二日 北京大学評議会評議員に当選。⁽⁴⁸⁾

一九二三年一月十九日 「聯席會議」出席の「北大教職員臨時代表団」の代表二十四名の一人に選出される。⁽⁴⁹⁾

同年一月二十一日 「北大教職員臨時委員会」の委員に選出され、同委員会主席に推挙される。⁽⁵⁰⁾

同年九月二十一日 政治学系系主任を退任。⁽⁵¹⁾（後任の系主任に周覽教授就任）。

同年十月八日 ロシア、ドイツ、オーストリア、スイス、フランスなどを巡る在外調査研究に出発。⁽⁵²⁾

一九二五年七月 在外調査研究旅行から帰国。⁽⁵³⁾

いささか無機的な「履歴書」風になってしまったが、これを通覧すれば、陳啓修が着任後の早い時期から、系主任、評議員、各種委員会の委員などの、北京大学の学内行政における要職に次々に就いていることがわかる。それが周囲に推されたものか、本人の自発的意志によるものかは定かではないが、いずれにしても、陳啓修が政治学系教授会主任に再選され、また評議員に選出されていることなどを見ると、大学行政における彼の能力と奮闘が、学内で漸次着実に認識され評価されていた結果として考えてよいであろう。さらに加えて、この閥歴からは、陳啓修が大学行政の執行に関わる責任ある位置にあっただけでなく、北京大学の教職員組織である「教職員会」の委員、「北大教職員臨時委員会」の主席（議長）、あるいは「聯席会議」の代表など、教職一体の運動においても、彼が指導的位置にあったことがわかり、大学全体の営み総体に主導的に関わろうとした、その積極的姿勢を見ることができるといえる。陳啓修は右に見たように、一九二〇年代の前半期に、北京大学において様々な指導的職責を担っているが、ここでそれらを通して行われた彼の奮闘・活躍を示す一つの具体的事象を取り上げておこう。

一九二三年一月、北京大学校長蔡元培が校長職を突如辞任する事件が持ち上がる。

前年の十一月、北京政府財政総長（蔵相）の羅文幹（鈞任）に取賄容疑が持ち上がり、衆議議長吳景濂、副議長張伯烈などが策を弄し、黎元洪大總統に迫って京師地方檢察庁に羅文幹を逮捕拘禁させたが、檢察は証拠不十分で起訴猶予とし、羅を釈放した。張紹曾内閣の下で、前年十一月に教育総長（文相）に就任した彭允彝は、議会の衆参両院における就任同意案件の通過に必要な国会議員の票数を確保するために、羅の追い落としを狙う吳、張などと政治的な取引を行い、國務院會議（閣議）で羅文幹の再審査を要求する提案を行った。これは教育事項を主管する教育総長の権限を越えるものとして、何人かの閣僚が反対したが、結果として羅文幹は再度取監された。⁽⁵⁵⁾

羅文幹は蔡元培が極めて信頼を寄せる人物だった。蔡元培はかつて法律学系の兼任講師として羅を北京大学に招聘し、また一九二〇年年末からの海外視察には羅を随行させた。『努力週報』第二期（二二年五月十四日）に、「好人政府」提唱する「我們的政治主張」が発表されたが、蔡元培、胡適、陶行知、梁漱溟、陶孟和、李大釗など十六名の署名者の一人として、羅文幹もそこに名を連ねている。

一九二三年一月十七日、蔡元培は、「司法の独立に干渉し人権を蹂躪する教育当局」と関係を断ち、国立北京大学長の職を辞すとの声明を出し、黎元洪大總統に辞表を提出して即日北京を離れ、天津に居を移す。

この辞任は、羅文幹の再取監、とりわけみずからの地位を固めるために背後で策動した教育総長彭允彝本人の為人、そして彼を長とする教育当局の粗笨な教育施策、軍閥政府の政治腐敗などに対する、蔡元培の拭いがたい不信がその背景にあった。一月十九日には、国会における彭允彝就任承認案件の採択を阻止するために、北大、法専、医専、工専などの学生が衆議院へ大規模な請願行動を行い、院の衛視と衝突して三百名余の学生が負傷するなど、学生の不満も急速に高まった。⁽⁵⁸⁾

蔡元培の校長辞任にともない、北京大学では評議員の王星拱、李大釗、朱希祖、馬裕藻、譚熙鴻の提案で、一月十八日に評議会特別会議が開催される。⁽⁵⁹⁾この特別会議で蔡元培の校長辞任問題が討議され、「……本評議会同人全体は校長の行動に対して深く同感し、本来ならば後に随って辞職すべきである。しかしながら、全学生の学業を配慮したため、本日評議会を開催し、暫時本評議会の名で、評議会が総務長及び教務長と共に、教育当局の問題、及び校長留任問題が明確に解決される日まで、本校の一切の事務を行う」なる決議を採択、これを「評議會布告」として公にした。⁽⁶⁰⁾陳啓修もむろん評議員の一人としてこの会議に参加した。彼はその席で、大学の臨時事務一切の処理を担当する評

議會内の委員の選出をみずから提案し、投票の結果、陳啓修は王星拱、馬幼漁と共に、三人の委員の一人に選ばれた。⁽⁶¹⁾ 北京大学教職員會は、黎元洪に宛てて彭允彝の罷免と蔡元培の慰留を求める文書を呈上し、「北京大學全體教職員宣言」を發表、あわせて通常通りに授業を行うことを決めた。黎元洪宛の呈上文の末尾には、十九名の「北京大学教職員全體代表」の一人として陳啓修が名を連ねている。⁽⁶²⁾

またこのような事態に対応するために、北大には教職員一体の組織として「北大教職員臨時代表團」、⁽⁶³⁾「北大教職員臨時委員會」などが結成される。

「北大教職員臨時代表團」は、「北京國立專門以上八校教職員聯席會議」⁽⁶⁴⁾（「聯席會議」）に出席する北京大学としての代表団であり、一月二十日の代表改選選挙の結果、陳啓修は二十四名の代表団の一人に選ばれた。⁽⁶⁵⁾

この「聯席會議」も、今回の事態について、彭允彝の教育総長就任を認めないとする「宣言」を發表し、また大總統、國務總理が彭を罷免しなければ教育界はますます紛糾するという趣旨の呈上文を、大總統府、議會に送付した。⁽⁶⁶⁾

「北大教職員臨時委員會」の方は、蔡元培が校務から離れたため、北大の校務が全体として停滞を来したつづつあつた中で、一月二十一日、教職員全体會議を開き、校長の慰留と、その他一切の管轄事項を処理する臨時代表會を組織するという決議を採択、その結果結成されたものである。基盤は北大教職員會を引き継いだものではあつたが、校長不在という事態の深刻さに対応して、北大の校務全般の維持と、校務にわたる執行権限の行使を企図する教職員非常委員會という性格を帯びた組織であつた。二十一名の臨時委員會委員が選出されたが、陳啓修はここでもその主席になつてゐる。⁽⁶⁷⁾

この「北大教職員臨時委員會」は、委員の代表が總統府に赴いて黎元洪と会見を行い、また呈上文の送付、声明、

宣言の発表などの一連の行動を通して、彭允彝の罷免と蔡元培の校長復帰を実現するために奮闘した。⁽⁶⁸⁾ 陳啓修はその「北大教職員臨時委員会」の主席でもあった。主席に選ばれた陳啓修、彼が臨時委員会主席としての役割を、主導的に果たしたであろうことは想像に難くない。

北大の各階層の反対声明や反対行動、北京の学生の議会へ向けた請願行動、反対世論の沸騰にもかかわらず、彭允彝は衆参両院で過半数の信任票を得て、一月三十日、正式に教育総長に就任した。彭は正式就任後、大学に「学風の整顿」を命じ、学生運動を厳しく禁止する措置に出た。もともとは彭の罷免、蔡の校長復帰が目標だった学生運動は、政界の腐敗を糾弾する政治斗争へと性格を変え、ますます激化の様相を呈す。この事態に、北京の六大学評議会代表聯席会議も「およそ彭允彝が署名した教育部の一切の公文は、一律に受け取らず」という声明を発表する。

蔡元培は四月天津を離れ上海へ、さらには五月に杭州を経て故郷の紹興へ籠居する。この間も北京大学をはじめとする各界各層の、請願、決議、書信、電報、あるいは直接の来訪による説得など、校長復帰への再三の働きかけが行われたにもかかわらず、蔡元培は北京政府、北大との関係を徹底的に絶とうとするかのように、校長復帰を固辞し続ける。

六月二十一日、陳啓修は北京大学教職員の代表として楊芳、段子均と共に、わざわざ北京から遠路遙々紹興の蔡元培のもとに赴き、直接会って復帰を説得する。⁽⁶⁹⁾ だがやはり蔡元培の固い決意を覆すことはできなかった。

一九二三年七月、蔡元培は長期の海外旅行の途につく。校長に復帰する機会は完全にとざされた。蔡元培の帰国は一九二六年のことになる。

北京大学では同年八月、総務長の蔣夢麟が正式に校長代理に就任する。

六月のいわゆる「北京政変」によって、黎元洪はすでに直隸派によって追放されていた。教育総長の彭允彝が罷免されたのは九月、それは蔡元培が出国した後のことだった。

以上のように、陳啓修は、北京大学をあげて展開された彭允彝の罷免、蔡元培の校長復帰を目指す運動の中で、北京大学政治学系教授会主任として、北京大学評議会の評議員の一人として、「北京大学教職員全體代表」の一人として、また「聯席會議」に出席する「北京大学教職員臨時代表団」の代表の一人として、そして「北大教職員臨時委員會」の主席として、結果としては蔡元培を校長に引き戻すことは叶わなかったが、まさに一身を挙げて、そのために八面六臂ともいえる奮闘を行った。

三 海外派遣とモスクワ滞在

一九二三年九月二十三日、陳啓修の渡欧を翌月に控えて、北京大学政治学系の三年生の学生によって、午後二時から第二院の教員休憩室で、送別茶話会が開催された。これはそれぞれの学生が一人あたり五角を負担して、茶話会の費用をまか⁽⁷⁾な⁽⁷⁾った。

また、学生の送別茶話会とは別に、北京大学政治学系としての歓送会も開かれた。

私は、北京大学で六年にわたり教授を務め、事務と学術の両分野に全力を注いでまいりました。事務分野については、今さしあたり申しあげることはいたしません。私が学術分野で担当しておりますのは、憲法、統計学、財政学、現代政治、演習等々であります。自ら顧みて、何らの貢献もなしえておりません。にもかかわら、皆

様から叱責を蒙ることなく、かえって歓送会を開いていただくことになり、まことに言葉では表せぬほどの驚きを感じております！……（中略）……私と皆様は友人であります、ふだん拝顔してお話をする機会がありませんでしたことを申し訳なく思っております。ところが本日このような機会がもてましたことをとても嬉しく思いまして、皆様にお話するために、意を決して歓送会にやってみりました。先程司会者の方が申されたことではありますが、まず第一は健康に留意せよとのことであり、そのご厚情にはまことに感謝するものであります！第二は、消息を手紙で知らせてもらいたいとのことでありましたが、申すまでもなくその心づもりであります。と申しますのは、私の今回の渡欧の目的が、ロシア、ドイツ情況の調査にほかならないからであります。／ロシアの情況に關します調査と報告は、いずれも極めて少なく、たとえ僅かにあつたとしても、共產主義についての分野であります。客観的な面を使うことのできる觀察はさらに希有であります。中国がもしロシアと關係なしとするのであるなら、なおその情況が明瞭になるのを安閑として待つのもよいであります。しかしながら、中国の情況に照らしてみますと、實際は早急に理解しなければならぬのであります。現在列強の帝國主義が極めて勢力を得、中口両国はどちらも被圧迫者であります。ロシアは現在なお持ちこたえておりますが、今後は中国と連合して帝國主義的な資本主義に反抗しなければならぬのであります。このような道理はおそらくどなたも否認することはできないのではないのでしょうか。したがって、我々はロシアの情況に対して早急に理解する必要があります。私が赴きます意図は、その實際のありさまを書きとめたいということにほかなりません。……（以下略）

右はその歓送会で陳啓修が行つた挨拶の冒頭部分である。

蔡元培の校長辭職事件の結果がとまれ一段落して、大学が新学期に入った十月八日、陳啓修は北京を發つて欧州に向かう。⁽⁷³⁾ 北京大学の派遣による、ロシア、ドイツなどの視察調査がその目的であつた。

陳啓修がヨーロッパに向かおうとしていた一九二三年は年初から、中国にとって大きな転換の年でもあつた。一月には、国民党の改進黨言が發せられ、また孫文がソ連のヨツフェと共同声明を發表して「聯蘇」に踏み込まず。二月末には、広州に孫文の第三次広東軍政府が樹立される。北京では、二月に京漢鐵道總工会の結成を直隸派が武力で弾圧した「二・七惨案」が、六月には直隸派によって大總統黎元洪が追放される「北京政變」が起こつている。

陳啓修は渡欧の抱負を語る中で、特に中国にとつて、帝國主義に反抗するために同じ被壓迫者であるロシアと連合する必要がある、そのためにはロシアの現状を正しく把握する必要性を強調する。この渡欧の間、結果的に彼は二度にわたつて、合わせて九ヶ月余りをモスクワで過ごすことになるが、ロシアの現状を正確に把握するためには、モスクワに出来るだけ長く滞在して、ロシアを研究し、理解する必要があるという心づもりを、すでに出發前に固めていたのである。ロシアへ強い関心、ロシアの現状を正確に把握しなければならないという願望、これは陳啓修の専門学問領域での學術的関心や願望に止まらず、右にあげた中国の政治動向、とりわけ北伐の推進にロシアとの接近を深めつつあつた孫文の国民党、あるいは中国共産黨の動向などに関わる、現実政治に密接に関わる彼の関心でもあつた、と考へてよからう。

歡送会の挨拶はさらに続き、中国の政治情況が大きな變動に直面していたこの時期に、彼は「広義の政治学研究」を行う必要を強調する。「広義の政治学研究」とは、陳啓修にとつて、政治学の學術レベルの研究に止まらない、政治への積極的な関わり、實際の政治活動を促すものであつた。中国の政治を改善するためには、「団体の組織、団体の活

動が絶対に欠かすことはできません。少なくとも、北大政治系は中国の政治的な現況を連合して研究し、さらには外国の政治の各分野を研究し、また政治団体を組織する必要があります⁽⁷⁴⁾と訴える。陳啓修はこの中で「政治を学ぼうとする者なら、中国は結局のところ議会政治を施行できるかどうかという問題に対して、それに答える責任を当然負っているのであります⁽⁷⁵⁾」と述べているが、この「中国は結局のところ議会政治を施行できるのか」という問いかけは、先に見た蔡元培の辞職をめぐって北京の軍閥政府と国会がとった様態、そして直隸派による黎元洪の追放に到る一連の政治的事態の推移を、つぶさに目の当たりにしてきた陳啓修の、「議会政治」に対する懷疑と深い失望を表したものと考えることができよう。

北京を発つてシベリア鉄道でまず最初にロシアの地を踏んだ。陳啓修は翌一九二四年三月末頃までモスクワにほぼ五ヶ月間滞在する⁽⁷⁶⁾。

彼はモスクワから、出発前の歓送会で確約した通り、北京大学の同僚宛に手紙を書く。その中で「三ヶ月で、Berlinのロシア語会話の本から始めて、ロシア語の本を八冊精読し、現在では社会科学書(例えばレーニンの『国家と革命』)及び新聞は、ほとんど辞書を引かなくても、大意を誤らずにつかむことができるようになりました。ロシア語の会話のほうはやはりもどかしさは感じますが(主な原因は耳が悪いことにあります)、ただ日常生活の用語だけはどのようににかいにか使いこなしています⁽⁷⁷⁾」と述べているように、モスクワに着いた陳啓修はまず懸命にロシア語を学び、少なくとも読むことは短期間でかなり上達したようである。

この手紙で、陳啓修は、モスクワの物価、社会生活の様子、宗教問題の現状、学校教育、大学・研究所の現状、東方大学⁽⁷⁸⁾ (КВТУБ) の中国人留学生、中国居留民の情況、ロシアの政治、新経済政策、社会科学の面でのロシアの教育

政策など、その当地で見聞・観察した事柄を、政治・経済学者としての自身の評価も交えながら、要領よく報告している。

陳啓修がモスクワに在った二三、二四年は、ソビエトでは、それまでの「戦時共産主義」に替わって、一九二一年に「新経済政策」(ネップ)が導入され、余剰農産物の農民による自由処分、貨幣流通、一部企業の有化の解除、独立採算性、市場原理の導入を通して、ロシア経済が比較的順調に復興しつつあった時期にあった。

この「新経済政策」に関して、陳啓修は「……彼らの新経済政策の目的は、人間の経済的利己心(功利心)を必然的な共同生産と共同消費の成立までもっていくことなのです。彼らの根柢は、マルクス経済哲学の応用であり、言い換えれば、人間の経済行為は永遠であり、単純に利己心から出ているとする、英国派の経済学の主張とは異なり、また、以前あるいは現在の経済社会は意識的な共同心を当然含んでいたとする、ドイツ派の経済学の主張とも異なるのです。彼らは、人間の経済的功利心は必然だが、必ずしもいわゆる『資本主義の弊害』という結果が生まれるとは限らないと考えるのです。彼らは、人間の経済社会において意識的な共同心を持つことは可能であるが、物質的にそうせざるを得ない条件が備わらなければならぬと考えるのです。したがって彼らの経済政策は、マルクス経済哲学のために実験を行い、人間の経済社会の進展に新たな途を切り開くものであると言えます。彼らが個人企業を許容するのは、個人にその経済的功利心をできる限り發揮させ、経済生活の向上を懸命に求めているからなのです。彼らが国家の力を用いて自由に経済を操り、価格を左右するのは(この種の事柄がもつとも誤解を受けています)、個人の経済単位の上に意識的な共同心を生みだすためなのです。したがって彼らはわけもなしに共産主義の理想を実現しようと思っっているのではなく、また盲目的に資本主義の方法を採用しているのでもありません。彼らの経済政策の将来

は、産業が未発達の家に対して明確な手本になるだけでなく、各先進国の労働運動に対しても影響を与え、新しい方針を確定させることは確かであり⁷⁹⁾と記し、彼は経済学者として「ネップ」に対して肯定的な見解を述べている。

また中国と直接関連した事柄としては、東方大学在籍の中国人留學生について記した条りが興味深い。

陳啓修は「当地の中国人學生で東方大学に在籍していない者はただ二人だけで（ベトログラードにいる者もわずか二人だけと聞いています）、極めて少数と言うべきでしょう。東方大学はT・I・K・P（第三インター）が設けたもので、ロシア政府には属さず、その目的は専ら社会科学の研究者、及び宣伝者の養成にあり、必ずしも共産主義者の養成にあるわけではありません。この学校に在籍する中国人學生は現在七十人余りで、大抵みな質朴沈着で研究心に富んでおり、集団的な訓練に習熟しています。啓修、先に蔡元培先生への手紙に、『彼らの質朴沈着なところ、老同盟會員に劣らず、その見解には科学的根拠あり（むろん高級學生について言えば）、はるかにそれを越えるものなり』という評語を一言記しておきましたが、自分では正しい評価だと思っています。彼らは、常軌を逸した空想家ではなく、科学的見解をもった實際家であります。彼らは中国では共産主義の宣伝を行なわないと主張するだけでなく、国内の兵士・農民・労働者・商人（原文「土農工商」）の各階級と連合して国民的な革命を行うことを主張していることから、おおむねそれはわかり⁸⁰⁾ます」と述べ、東方大学の中国人學生のあり様を肯定する。

東方大学の中国人學生が「中国では共産主義の宣伝を行なわないと主張する」、あるいは「国内の兵士・農民・労働者・商人の各階級と連合して国民的な革命を行うことを主張している」というのは、コミンテルン第四回大会（一九二二年十一月五日〜十二月五日）、コミンテルン執行委員会の「国民党にたいする中国共産党の態度の問題についての」

(一九二三年一月十二日)、同「中国における民族解放運動および国民党の問題についての決議」(一九二三年十一月二十八日)などを承けて、コミンテルンの中国政策が、中共黨員の国民党への入党による「国民革命」の推進へと向かおうとする転換に符合したものと考えられる。国内では、一九二三年十一月、孫文が「聯蘇・容共・扶助工農」の三大政策を決定して、国民党の改組宣言を発表、それを受けて翌二十四年一月、広東で開催された国民党第一回全国代表大会で第一次国共合作が成立する。これらはいずれも陳啓修がまさにモスクワに滞在中のことであった。

陳啓修がレーニンの葬儀に参加したことは先に触れた。

周知のように、レーニンの死の直前には、ロシア共産党内におけるスターリンとトロツキーの分裂が公然化しつつあった。一九二三年十二月十五日、スターリンは『プラウダ』の論文で反対派への全面攻撃を開始し、それはトロツキーに対する辛辣な個人的攻撃で結ばれていた。これはジノヴィエフ、カールネフ、ブハーリンら「三人組」による激しいトロツキー批判キャンペーンの前触れであった。そして二四年一月のレーニンの死後、この問題はますます表面化し先鋭化する。彼は新聞報道や、あるいは東方大学の知人からその過程、動向を身近に見聞きできる場にあつたのであろう。陳啓修はこの問題について、「この二ヶ月間に、ロシア共産党内部で権限問題が発生し、社会的にロシア人とユダヤ人の間がしつくり行かない傾向が出てきていることも免れませんが、新しいロシアの国家基盤が、労働者農民青年の共産党の上に築かれていることを知れば、むろん私たちは、そのような事件は些細な出来事であり、大波を引き起こすには値しないことを知らなければなりません」と記しており、かの権力闘争の前途に対しては概して楽観的であつた。

陳啓修はこのモスクワ滞在中に、当時東方大学の学生だった中共黨員の羅亦農(羅覚⁽⁸²⁾)、及び中共モスクワ支部書記

であり、ロシア共産黨員でもあった彭述之と往来している事実も注目される。それも互いにかかりの信頼関係にあったことがわられる⁽⁸³⁾。

その後、二十四年四月の初め、陳啓修はモスクワを発つて（この直後、中ソ間には国交が樹立され、ソビエト・ロシアは旧ロシアの在华權益、治外法権、義和団賠償金などを放棄する、同年五月のことである）、ドイツに向かい、オーストリア、スイス、フランスを巡る。この間の彼の事跡はほとんど未詳であるが、ベルリン、及びパリで、彼は国民党のために講演を行った⁽⁸⁴⁾。おそらく講演のテーマは、国共合作や「国民革命」に関するものであったはずである。

陳啓修はこのヨーロッパ諸国歴遊の後、一九二五年初め（少なくとも三月、三月以前の可能性も否定できない）には、再びモスクワに戻る⁽⁸⁵⁾。これは二度目のモスクワ滞在ということになる。三月十二日、孫文が北京で病没、陳啓修はモスクワでロシア人のために孫文を追悼する演説を行う。この二度目のモスクワ滞在中にも、陳啓修は北京大学教務長顧孟餘宛に、六月十四日付で手紙を書き、モスクワでの様々な見聞を知らせているが、そこでは、とりわけ中国の「五卅運動」に関わる見解に多くの筆が費やされている。

この二度目のモスクワ滞在中に、何よりも陳啓修の心を激しく揺さぶったのは、一九二五年五月三十日、上海で起こった「五卅運動」と、それに対する大規模なゼネストによる抗議運動の動向であった。

彼は異国の地モスクワで「五卅運動」の発生を聴いてからは、「神経が非常に落ち着かなくなり、終日この事件に関する記事の載っている新聞を読み耽り、もう机に向かつて勉強することができなくなってしまった」、「小生ロシアの新聞を読んで、中国の全国人民がすでに立ち上り、上海のゼネストを支援しているのを知り、国民が中国の運命に対する今回の事件の重要さをすでに理解していることがわかりました⁽⁸⁶⁾」と記し、事件に強い衝撃を受け、中国での抗議

行動の広がりには深い期待を寄せていることがうかがわれる。

陳啓修は、「五卅運動」とゼネストによって大規模な抗議行動に立ち上がった上海民衆運動について、「中国は八十四年前に帝国主義の圧迫を受けて以来、今回の帝国主義者の行為が最も凶暴残酷であると考えます。なぜなら欧米の労働者が夙に享受している十時間労働制、集会結社権、強制労働の免除、ストライキ権などを要求したために射殺され、その酷さは空前のものだからです。全国の労働者、知識分子、大小商人、ないしは官僚軍閥がみな立ち上がって帝国主義の圧迫に反抗しており、これは中国と帝国主義の闘いの歴史において初めてのことであり、このように各階級がみな立ち上がって反抗した例はこれまでに見いだすことはできません。ここから、国民の自覚がすでに相当程度に達し、国民革命運動がすでに不可避な客観的必要になったことが見てとれます」、「上海ゼネスト事件の勝利がもし中国側に帰せば、中国の国民革命運動は必ずや大きく拡がり、数年後に中国が不平等条約を覆し、帝国主義者の中国での非人道的な経済搾取をやめさせることは必定です。その結果、帝国主義者は現在のようにやれなくなり、搾取した一部分を自分らの本国に持ち帰り、職制を買収して、本国の労働者の革命運動を抑えつけ、その結果彼ら本国では革命が起き、彼らの植民地も独立を宣言することは必定です」と述べている。

モスクワからの手紙には、出発前の歓送会での挨拶、あるいは最初モスクワ滞在期の手紙にはなかった、明らかに異質の、一種の「精神の高揚」、あるいは「政治的興奮」とでも言うべきものを見てとることができる。出発前、あるいは最初のモスクワ滞在時には意識されなかったものが、彼の内面に大きく膨らみつつあった。

この二度目のモスクワ滞在時期に、陳啓修は中国共産党、中国国民党に入党したと思われる。彼の入党は、最初のモスクワ滞在時から交流のあった彭述之や羅亦農の仲介あるいは働きかけに依るところが大きかったのではないだろう。

うか。ただしこれは今のところ推測の域をでないか。⁽⁸⁸⁾

「五卅運動」は、異境の地にあつたとは言え、陳啓修に中国においては「国民革命」が不可欠であるとの認識を深めさせ、また自らが意志的に「国民革命」への参加を追求する転機になつた事件とも言える。言い換えれば、「五卅運動」は実質的に、彼が帰国後間もなく、北京大学の教授から「国民革命」の最前線へと身を投じていく、その実際的な契機になつた事件として位置づけることができよう。「全国の労働者、知識分子、大小商人、乃至は官僚軍閥」まで含めた中国の「国民革命」の遂行という観点は、これ以降、彼の中に揺るぎない認識として貫かれ、武漢政府崩壊後においてさえ、そのような観点は強まることがあつても薄れることはなかつた。これはコミンテルン本部の所在地であつたモスクワにあつて、意識するとしないとに関わらず、コミンテルンの方針の影響を何らかの形で受ける中で形成された側面も否定することはできないが、中国の「国民革命」がどのような階級、階層によって担われなければならないかという問題は、陳啓修が「五卅運動」をめぐる事態の推移をとらえる中で、彼の内部に把握されていった独自の確信でもあつたと言えよう。

先にも紹介したが、「五卅運動」に連帯するモスクワでの集会で、陳啓修は登壇して演説を行い、また別の集会ではジノールヴィエフの演説を聞いて、それに満腔の拍手を送つた。⁽⁸⁹⁾

このジノールヴィエフ演説は、ドイツ語からだが、その内容を知ることができる。⁽⁹⁰⁾

片山潜も参加し、ドイツ、中国、イギリス、アメリカ等の代表が演壇に立つたその集会は六月十二日に行われた。

ジノールヴィエフは、「……上海の事件はそれ自体としては暴力的ではない。しかしながら世界的な基準で見ればより暴力的な事件への小さな前兆である。六百万の中国の若き労働者は、八時間労働、児童と婦女子の労働反対、日曜の休

息という要求を掲げている。これは六十年前にイギリスの労働者が掲げた要求である。現在、労働運動と民族革命的解放運動の流れが互いに合流して進んでおり、この一体となった流れはますます激しいものになろう。官僚と反動的な將軍らを除いて、すべての中国国民はほとんどがこの解放運動に参加しようとしている／＼プロレタリアートがこの運動を導いていくであろうことはますます明らかになってきている。なぜなら、たとえまだ無力で組織化されてはいないとしても、労働者階級以外のどんな勢力もこの解放運動を実現できないからである。上海の大量虐殺の後に、中国の労働者らは帝国主義的攻撃に対して、自らを積極的に防御するために武装を決意するであろうと予測することに、もはや予言者は必要ではない。我々の世代は今後、民族革命的解放運動が世界革命の直接的な構成要素となるであろうことを、体験するだろう。我々は大きな誇りをもって見守っている、上海における運動が若い共産党と若い共産主義青年同盟によって導かれていることを。／＼……眞実の状況を伝えるために、中国の代表団が西欧に赴くなら、西欧の労働者の代表団も中国に行く必要がある。……すべての西欧の労働者たちは、残念ながら、現在まで長期にわたって東洋の働く人々の解放闘争の意義と影響を理解してこなかった。この東洋の働く人々の覚醒こそが、西欧のプロレタリアートが解放される不可欠の前提である。……」と述べて、上海の闘争に連帯を表明した。

それは型どおりのアジテーション演説という性格を免れないとしても、「五卅運動」が起こってからまだ十日余りしか経ておらず、陳啓修にとつては、それが自国で起こった大規模な反帝運動に対する熱い連帯を表明したものであり、かつコミンテルンのトップたるジノーヴィエフが行ったものであるとすれば、彼がそれを肉声で聴いて、二千の聴衆と共に感動と興奮の拍手を送ったことはごく当然と言えよう。

ジノーヴィエフの演説では、中国の民族解放闘争における労働者階級、ないしはプロレタリアートの指導性が比較

的強調されている。先に触れた「全国の労働者、知識分子、大小商人、乃至は官僚軍閥」まで含めた、より広範な階級、階層によって「国民革命」が担われなければならないという陳啓修のとらえ方とは、概して力点のおき方に違いを感じさせるが、それは逆に陳啓修の観点の独自性を示していると思われることができる。

たとえモスクワで連帯の集会に参加し、自ら登壇して訴えたとしても、「五卅運動」をめぐる国内の抗議運動を、なお異境の地にあつていわば拱手傍觀し続けることは、彼にとつて忸怩たる思いがあつたのであろう、「……学校から与えられた休暇の期限が迫り、同僚諸氏には長い間校務の苦勞をかけたばなしであり、小生あえて、自分では外国にさらに留まりたいと望むことはできません。加えて現在、上海のゼネスト運動は一日と拡大して、中国国民の今後数十年の命運に大いに影響する情勢にあり、小生、国民の天責を放棄していたずらに外国で遠くから呐喊の声をあげたいとも思いません。ですから、小生、ほぼ二週間以内にシベリアを経て北京に戻ることをすでに決定いたしました、……」⁽⁹²⁾と。

一年九ヶ月余にわたる海外生活の中で、モスクワに滞在した期間が最も長く、合わせて少なくとも九ヶ月を越えた。帰国の決意を記した顧孟餘教務長宛の手紙をしたためてから二週間後、陳啓修は海外視察、在外研究を終えて、モスクワからシベリア経由で北京に戻る。それは一九二五年のおそらく七月のことだつた。⁽⁹³⁾

北京に戻つた陳啓修は、その年の夏期休暇を経た新学期から、また北京大学政治学系の教授としての教育研究活動に復帰する。また「関税自主運動」への参加、さらに『晨報』紙上で行われた「聯蘇・仇蘇論争」など、帰国した陳啓修には、一九二五年の多忙の秋が待ち受けていた。許された紙幅にすでに達しているので、それらについては次稿で論じたい。

(待続)

1 芥川龍之介の北京到着期日については、六月十二日、十四日の両説がある。ここでは宮坂覺編「年譜」(『芥川龍之介全集』第二十四卷)岩波書店、一九九八年三月)所収)の、「11日(上)京漢鐵道の列車の中で、John Masefield “A tarpaulin muster” を読了。……北京に到着。翌月10日頃まで、日本人が経営する扶桑館に滞在した……」(同書一四九頁)の記載に拠って十日と二日とした。

2 「北京着 北京はさすがに王城の地だ此處なら二三年住んでも好い/夕月や槐にまじる合歡の花/六月十四日」(芥川龍之介書簡「岡榮一郎宛(絵葉書)」)、「拝啓北京にある事二日既に北京に惚れこみ候、僕東京に住む能はざるも北京に住まば本望なり昨夜三慶園に戲を聴き歸途前門を過ぐれば門上弦月ありその景色何とも云へず北京の壯大に比ぶれば上海の如きは蠻市のみ」(同「室生犀星宛(絵葉書)」、六月二十一日)と、龍之介は知人に宛てた書信に、北京の対する並々ならぬ愛着を書き記している。

3 芥川龍之介「雜信一束」、(同『支那游記』「改造社、大正十四年十一月三日」所収)。

4 芥川は「江南游記」の「前置き」で、「私は北京の紫禁城を思つた。洞庭湖に浮んだ君山を思つた。南國の美人の耳を思つた。雲崗や龍門の石佛を思つた。京漢鐵道の南京蟲を思つた。廬山の避暑地、金山寺の塔、蘇小小の墓、秦淮の料理屋、胡適氏、黃鶴樓、前門牌の煙草、梅蘭芳の嬌娥を思つた。……」と特に胡適の名を挙げ、また『侏儒の言葉』の中でも、「胡適氏はわたしにかう言つた。——『わたしは「四進士」を除きさへすれば、全京劇の價値を否定したい。』しかし是等の京劇は少なくとも甚だ哲學的である。哲學者胡適氏はこの價値の前に多少氏の雷霆の怒を和げる訣には行かないであらうか?」(『虹霓關』を見て)と、胡適が京劇について自らに語つた言葉を記している。

5 「胡適日記」のテキストは『胡適的日記 手稿本』(遠流出版事業股份有限公司、一九八九年五月四日發行)を用いた。同

書第一冊、一九九頁。

6 前掲、『胡適的日記 手稿本』第二冊、二〇二頁。

7 前掲、『胡適的日記 手稿本』第一冊、四九頁。

8 前掲、『胡適的日記 手稿本』第二冊、四一頁。

9 内ヶ崎作三郎(1877-1947)大正・昭和の政治家。東京帝国大学英文科卒、英国オックスフォード大学留学。帰国後早稲田大学教授・理事となる。大正十三年から衆議院議員に当選、憲政会・立憲民政党を経て、日本進歩党に所属。昭和十六年から二十年まで衆議院副議長。

10 福田徳三(1874-1930)経済学者。東京高等商業学校卒業後、ドイツに留学、歴史学派経済学者ブレンターノに師事。帰国後は、母校の東京商科大学教授に就任、法学博士、帝国学士院会員となり、社会政策学派の一人として経済理論や経済史を導入した。また、吉野作造らとともに黎明会を組織、デモクラシー擁護の言論活動を行う。『資本論』を紹介するが、後期はマルクスを否定、河上肇のよき論敵であった。

11 「北京大學啓事」(『北京大學日刊』第一千零七六號「一九二二年十月三日」所載)に、「本月四日(星期三)下午二時、本校特請日本東京商科大学教授福田徳三博士在第三院禮堂講演。講演題目爲『馬克思主義的幾個基本觀念』、山陳惺農教授擔任譯述。福田博士爲日本新人會領袖人物、對於馬克思一派之學說、研究甚深。其盼本校同人屆時同來聽講。此啓。」とある。さらに『北京大學日刊』第一千零九十號、一千零九十一號、一千零九十六號、一千零九十七號の「講演録」欄に、この福田徳三の講演内容が連載されているが、その講演題目は、「北京大學啓事」の予告とは異なり、「馬克思主義的根本思想特別注重其布爾塞維克之關係」となっている。

12 植原悦二郎(1877-1962)大正・昭和の政治家。ワシントン州立大学、ロンドン大学などに学び、帰国後は明治大学教授。大正六年、犬養毅に求められて国民党に入り、衆議院議員に当選。昭和七年、衆議院副議長に選ばれ、軍部の独走と戦争の

陳啓修、東京におけるその文学的営為

拡大には批判的態度をとり、大政翼賛会結成に参加しなかった。戦後は日本自由党を結成、第一次吉田内閣の國務大臣となつた。

- 13 「法律學系 政治學系 教授會布告」〔北京大學日刊〕第一八一五號〔一九二五年十一月二十六日〕所載に、「本星期五日(本月二十七日)下午三時半特請日人植原悦二郎博士、在本校第二院大講堂爲公開講演、講題如左：『日本之政黨及政府』／上項講演、並已由本教授會商請陳啓修教授担任口譯。特此公。十四、十一、二十三。」とある。そして『北京大學日刊』第一八一九號、一八二一號、一八二二號、一八二三號に、「日本之政府及政黨」の表題で、その講演内容が連載されている。
- 表題の左に「十一月二十七日日本植原悦二郎博士在本校講演 陳啓修教授口譯 吳祥麟張榮福合記」の記載がある。

- 14 中国で陳啓修の閱歷を記した文献は極めて少ないが、①四川省地方誌編纂委員會、省誌人物誌編輯組編『四川近現代人物傳』第二輯(四川省社会科学院出版社、八六年七月)所載の「陳豹隱」(常裕如執筆)が比較的詳しい。他に、②《中華留學名人辭典》編委會編『中華留學名人辭典』(東北師範大學出版社、一九九二年十二月)、③『中國人名大詞典 当代人物卷』(上海辭書出版社、一九九二年十二月)に「陳豹隱」の項が、また、④陳玉堂編著『中國近現代人物名号大辭典』(浙江古籍出版社、一九九三年五月)に「陳啓修」の項が立てられている。①②③はいずれも「陳豹隱」で項を立てているが、「陳豹隱」は二十年代末に、陳啓修が經濟關係の書籍、文献を翻譯した際に用いた筆名であり、共和国成立後、彼はこれをみずからの正式な氏名として用いたのである。①では「陳惺農」は筆名とし、②は「原名陳啓修」、③は「原名啓修」と記載するのだが、④では「字惺農、改字莘農、一作辛農、又称星農(見《魯迅日記》、……)」とある。なお『北京大學日刊』には、陳啓修教授、陳惺農教授の呼称が混在して使われている。

- 15 註40参照。

- 16 「陳惺農教授自蘇俄來函」〔北京大學日刊〕第一四〇九號〔一九二四年三月三日〕所載に拠る。

- 17 「陳啓修先生致顧教務長函」〔北京大學日刊〕第一七三四號〔一九二五年七月六日〕所載

18 一九一九年にできた武漢で最初の大規模な総合娯楽場。「新市場」と呼ばれたが、二七年「血花世界」と改名される。漢口中山大道の中程の賢樂巷、現在「民衆樂園」がある位置にあたる。

19 「武漢新聞記者聯合會成立大會盛況」(『漢口民國日報』第一百廿三號「一九二七年三月二十二日発行」所載)に拠る。

20 前掲、「武漢新聞記者聯合會成立大會盛況」、及び「武漢新聞記者聯合會成立／今日在血花世界成立大會」(『漢口民國日報』第一百廿二號「一九二七年三月二十日発行」所載)に拠る。

21 「和東林定湖同游東京郊外」なるこの詩は、勺水「有律現代詩」(『樂羣(半月刊)』第四期「一九二八年十一月出版」所載)の中に収められている。本詩の拙訳をここに付しておく——「市電は飛ぶように奔り、土埃りが鼻をつく／突然、女の車掌がせわしげに声をあげる：／——『着きました、みなさまお降りください！／飛鳥山公園で、ご休憩ください！』／——『桜はもう咲いちちゃったじゃないか、残念！』／はくらはただ悔やむばかり、来るのが遅すぎたのだ。／——『兄ろよ！地面はどこも散った花びらで一杯だ／咲いている時よりよほど綺麗じゃないか！』／——花を愛でる男女が、一組また一組、／樹木の下の漫ろ歩き、仲睦まじい。／浮かれて踊りだす、酔ったふりの者、酔えば、花びらとともに眠むるのだ。／わざわざ花見に来たのに、心は満たされず、／気分を奮い立たせて、荒川へ向かう。／そこには、遊園地があつて、／小じんまりとした竹まいは、なかなかの趣きだ。／木の橋が幾つか、春水を湛える池がひとつ、／赤や白のボートが、水面に浮かび行き来る。／——『滝の音がするぞ！』——『どこだろう？』／——『若い女の春着の色は、本当にいいねえ！』／ここは、来るのが早すぎた、／色とりどりの桜は、まだ蕾。／——『川を渡って堤へ上ろう、見ろよ、／二つの川べりの眺めを味わってみるのもいいだろう！』／堤の上からの眺めは、まったく素晴らしい、／右側には村、左側には江戸川、／三方の川べりには緑の草、二条の川には白い波、／遠く遙かにいくつかの鉄橋が川を跨ぐ。／見遣れば橋の傍らには、たくさんの桜。／——『江戸川を渡るの、どうか？』／近づいて見ると、老木が緩やかに揺れ動き、／枝はすでに半ば朽ち、花はもう散り落ちていく。／終日花を尋ね歩くが、花に欺かれる、／心の中に想い描いてきた美しい花を実際に目にできるのは、難しいことだ。／

幸いにも、三人の仲間で、／そぞろ歩きながら語りあい、得意満面。／千住まで来て、道は狭まり／オートバイが駆け抜け、砂塵を巻き上げる。／『円タクで帰ろう！』、とみんなが一斉に声をあげる。／浅草の黄昏の灯は、絵のようだった。」

22 「飛鳥山花見」なるこの詩も、勺水「有律現代詩」（『樂羣（半月刊）』第四期「一九二八年十一月出版」所載）の中に収められている。本詩の拙訳をここに付しておく——「夢のように、十二年が過ぎ去り、また飛鳥山にやってきた。／丘の下の王子、遙かなる荒川、いずれも以前と同じようだ。／白髪の老媪が二人で花見、一人は唄い、一人は三味を弾く。／ぼくは彼女らが羨ましい、老いてしまい、花見で若者に倣うことはできない。／ぼくは四十を越えたばかり、だが、もう何をするのも億劫だ。／十数年前を思い起こせば、心は堅固、志は決然としていた。／突然に波乱が起り、革命！ わが心の弦線は断ち切られた！／ああ！生命に感動し、桜花の前でもう一度酔い痴れることが、どうしても出来ないのだ！」

23 吉少甫「馬恩列斯著作在我国の傳播」（上海市出版工作者協会《出版史料》編輯組編『出版史料』第二輯「学林出版社、八三年十二月」所載）に拠れば、これはドイツ語版に拠り、河上肇の日本語訳を参照して翻訳されたもので、中国で最も早い『資本論』の刊行であった。また、胡培兆・林圃著『《資本論》在中国的傳播』（山東人民出版社、八五年二月）にも、『資本論』の最初の翻訳者としての陳啓修の功績などに関する比較的長い記載がある（同書一三七頁―一三八頁）。

24 拙稿「怒吼罷、中國！」『覚書き』（『東洋文化』第七十七號「東京大学東洋文化研究所、一九九七年三月」）参照。

25 四川省地方誌編纂委員会、省誌人物誌編輯組編『四川近現代人物傳』第二輯（四川省社会科学院出版社、一九八六年七月）所載の「陳豹隱」（常裕如執筆）の項に拠る。

26 前掲、『四川近現代人物傳』第二輯所載「陳豹隱」に拠る。

27 前掲、『四川近現代人物傳』第二輯所載「陳豹隱」に拠る。

28 興亞院調査資料第九號『日本留學中華民國人名調』（興亞院、昭和十五年十月）の「特設豫科修了生」の頁に、「姓名」陳啓修「卒業年度」明治四十二年「原籍」四川「修了後配当校」一高（八十七頁）とあり、特設豫科は期間が一年である

ので、明治四十一年の入学であることがわかる。また「第一高等學校」の頁には「姓名」陳啓修「卒業年度」大正二「専攻科目」英法科「原籍」四川「備考」東京帝大、法學部、大正六年卒業（七十七頁）とあり、さらに「東京帝國大學」の頁に「姓名」陳啓修「卒業年度」同（大正六）「専攻科目」同（法學部）政治科「出身校」一高「原籍」四川、中江……」（三頁）とある。また陳啓修の卒業年次などは『東京帝國大學卒業生氏名録』（東京帝國大學、昭和十四年四月三十日）に拠った（同書一一七頁）。

29 『學藝』所載の陳啓修の文章には、第一卷第一號（一九一七年四月）に、「國憲論衡」、「歐洲大聯邦國論」、「中日貿易與日本産業發達之關係」、「梯勒迷（Joseph Barthelmy）著「庶民政治與外交秘密」（譯叢）、「對德外交之公正批評」（評論）が、同第一卷第二號（一九一七年九月）に、「孔道與國憲」（評論）、「抱影廬陳言附小引」（雜俎）が、同第二卷第二號（一九二〇年五月三十日）に「文化運動底新生命」がある。

30 註35参照。

31 この「陳啓修啓事」から、陳啓修の自宅が南池子にあり、当時は沙灘にあつた北京大学から比較的近い場所にあつたことや、当時大学卒で学校関係に就職した場合の、教務主任と平教員の当時の初任給の額やその差、あるいは時間給の額といったもの、また哈爾濱の学校では教師になるのに標準語が要求されていること、などがわかり至って興味深い。彼の住んでいた「葡萄園」という地名は今も南池子には残っていない。

32 陳啓修の閨歴については、回想録も、あるいは日記などを含む、同時期的な本人の証言や、また彼に関する周囲の人間の証言といったいわゆる第一次資料が、現在までのところ皆無といえる。したがって、北京大学教授であつた二〇年代前半期の陳啓修については、資料的には主として、北京大学の公報的性格をもつた『北京大學日刊』における、陳啓修に関する記載に拠ることになる。

33 「●陳啓修先生演說詞 陳政記」、『北京大學日刊』第六百九十五號（一九二〇年九月十七日）所載。

陳啓修、東京におけるその文学的當為

34 「政治教授會啓事」(『北京大學日刊』第七百十二號「一九二〇年十月七日」所載)に拠る。なお、北京大學政治学系の講座題目には、「政治學原理(國語講演)」、「政治學或國家學」、「政治學史」、「政治史(自法國革命起)」、「現代政治」、「外交史」、「社會學」、「統計學」、「農業政策」、「商業政策(内國及國際)」、「工業政策及社會政策」、「市政論」があった(『北京大學日刊』第七百七十一號「一九二〇年十二月十七日」所載の「本科各系課程」に拠る)。もちろんここに挙がっているすべての講座が常時開講されていたかどうかは別問題である。

35 「▲法科研究所職員會議事録 臨時書記李芳記」(『北京大學日刊』第三十二號「一九一七年十二月二十五日」所載)に「法科研究所於十二月十二日下午三時／在法科學長室開職員會討論各種規則／及一切事務是日到會者爲／法科學長王健祖／法律門研究所主任黃右昌／政治門研究所主任陳啓修／經濟門研究所主任馬寅初／法律研究所事務員李芳臨時書記……」とあり、また「▲法科教員姓名及籍貫」(『北京大學日刊』第五十一號「一九一八年一月二十日」所載)にも「陳啓修 四川」とあり、陳啓修が少なくとも一九一七年十二月には北京大學に着任しており、法科の政治門研究所主任に就いていたことが確認できる。また後で触れる「陳惺農先生在政治系歡送會上的演說辭」(註72)には、陳啓修自身の言葉として「我在北大當了六年教授」とあり、これは一九二三年十月の言葉であることを勘案して逆算すると、一九一七年末の北京大學着任は符合する。なお、前掲『四川近現代人物傳』第二輯所載の「陳豹隱」には、「[19]9年初、他受聘爲北京大學教授。」(同書百九十七頁)とある。

36 「○大學本科教務處成立紀事」(『北京大學日刊』第三百四十八號へ一九一九年四月十日)所載)。そこに「理科學長秦汾君因已被任爲教育部司長、故辭去代理學長之職。適文科學長陳獨秀君亦因事請假南歸。校長特於本月八日召集文理兩科各教授會主任及政治經濟門主任會議。是日到會者爲秦汾、俞同生、沈尹默、陳啟修、陳大齊、賀之才、何育杰、胡適八人。……」とある。蔡元培校長によって特別に召集された「文理兩科の各教授會主任と政治經濟門の主任會議」とは、秦汾理科學長の教育部司長への就任、陳独秀文科學長の休暇請求にともなって、理・文科學長の職務を各系主任が交代で担当し、あらたに教務処を設置

して、北大に教務長の職務の新設を諮る会議であった。会議に出席した八名の教員のポストを、この前後の『北京大學日刊』で確かめると、秦汾が理科学長、胡適が英文系主任、沈尹默が中文系主任、俞同圭が化学系主任、陳大齊が哲学系主任、賀之才が仏文系主任、何育杰が物理学系主任であることがわかる。この時期、陳啓修は北京大学政治門研究所主任であり〔註35参照〕、まだ政治学系教授会の系主任にはなっていないので、系主任として出席したのではなく、おそらく「政治經濟門」の主任、あるいは代表として参加したのである。なおこの時の經濟学系主任は馬寅初、政治学系主任は陶履恭、両者ともこの会議には出席していないが、馬寅初が新設の初任教務長に就任した。このような教務面での制度改変を決めた重要会議に、陳啓修が出席していることは、彼に対する周囲の信頼を裏付ける一つの証と見ることもできる。

37 「本校布告」(『北京大學日刊』第四百七十號)〔一九一九年十月二十七日〕所載)に拠る。一九一九年十月二十五日午後二時から評議会が開かれて、各系教授会の評議員の選挙が行われ、胡適、蔣夢麟、俞同奎、馬寅初など十五名の評議員が選出された。胡適が最多の六十票、陳啓修の名も挙がっているが、二十四票と惜しくも落選している。

38 「▲各部委員及委員長之指任」(『北京大學日刊』第五百零九號)〔一九一九年十二月十一日〕所載)に拠る。陶履恭を長とする「預算委員會」の圖書担当委員として、また顧兆熊(顧孟餘)を長とする「圖書委員會」委員として、李大釗、朱希祖、宋春勳などと共に、陳啓修の名が見える。

39 「●本校教職員會委員選舉結果」(『北京大學日刊』第五百六十九號)〔一九二〇年三月二十三日〕所載)に拠る。北京大學教職員會の成立後、委員の選挙が行われ、教員委員の当選者二十六名、職員委員の当選者十五名、教員委員の補欠当選者十三名、職員委員の補欠当選者八名の、氏名と得票数が列記されている。陳啓修は七十八票を得、教員委員の補欠委員に選ばれている。因みに、胡適が教員委員の最多票を得て二百四十八票、蔡元培、李大釗は、それぞれ二百四十六票、二百四十票で、職員委員に選ばれている。

40 「●陶履恭啓事」(『北京大學日刊』第五百七十九號)〔一九二〇年四月二十日〕所載)に、(一)政治學系教授會主任、現

經二年、任期已滿。該系教授二人、互選結果、陳啓修先生得兩票當選。此後關於該系教授上各項事務、請與陳先生接洽爲要。／
（二）教務長一職、係由各系主任互選。今已屆任滿之期、日內即行改選。所有新教務長未選出以前、一切事務、暫由履恭代理。此啓。／九、四、九。」とあり、一年間系主任だった陶履恭に代わり、陳啓修が新たな政治学系教授会の系主任に選ばれた。

41 「蔡元培啓事一」（『北京大學日刊』第七百十六號「一九二〇年十月十四日」所載）に拠る。そこには「本屆評議會選舉、共收到選舉票四十三張、内廢票兩張、（因所舉超過法定人數）。茲將各教授所得票數、開列如下：」とあり、以下、陶履恭、顧孟餘、蔣夢麟、俞同圭、胡適、朱希祖、王星拱、陳啓修、李大釗、馬叙倫、何育杰、陳世璋、沈士遠、鄭壽仁、馮祖荀、張大椿と、評議員當選者十六名の氏名、及び票數が記されている。陳啓修の得票數は二十三票であった。

42 ●「評議會通告」（『北京大學日刊』第七百十九號「一九二〇年十月十八日」所載）に拠る。陶履恭を長とした「預算委員會」、俞同圭を長とした「聘任委員會」、顧孟餘を長とした「圖書委員會」の三つの委員会に、委員として陳啓修の名が見える。

43 「校長啓事（一）」（『北京大學日刊』第八百八十二號「一九二一年十一月三日」所載）に拠る。評議員選舉の當選者十四名、同數票で再度決選投票が必要な二名、及び次点以下八名の氏名と票數が、得票順に記されており、陳啓修は二十二票で落選している。

44 ●「校長布告（二）」（『北京大學日刊』第八百八十九號「一九二一年十一月十一日」所載）に拠る。馬寅初を長とした「組織委員會」、譚熙鴻を長とした「預算委員會」、陶履恭を長とした「聘任委員會」、顧孟餘を長とした「圖書委員會」の四つの委員会に、委員として陳啓修の名が見える。

45 ●「校長通告（一）」（『北京大學日刊』第一千零十一號「一九二二年四月二十六日」所載）に拠る。物理学系、中國文学系、英文学系、法文学系、政治学系、法律学系の六系で主任の改選が行われ、政治学系は、全員で八名の教授のうち一名が

未投票だったが、陳啓修が三票を得て系主任に当選している（再選）。因みにこの改選で、胡適は三票を得て英文学系の主任になっている。

46 一九二二年三月十五日の国立八校教職員代表会議において、北京の国立八校教職員の連繫により、教育の根本を強化するという宗旨で、「北京国立専門以上八校教職員代表聯席會議」の結成が決まった。北京大学、北京高等師範学校、北京女子師範学校、北京法政専門学校、北京医学専門学校、北京農業専門学校、北京工業専門学校、北京美術学校の教職員會代表の八校によって構成され、各校から三名の代表が参加、一票の表決権を有した。たびたび各校代表による「聯席會議」がもたれ、教育の独立、教育予算の増額、教育環境の充実などの問題を討議、時には教育部、交通部との交渉などを行い、奉直開戦の戦費の増加に伴う国立学校教職員給与の慢性的遅配の解消などを要求した。

47 「本校教職員臨時代表團第一次會議決議事項（十一、四、二十九日）」（『北京大學日刊』第一千零十七號）（一九二二年五月三日）所載に、「……決議（三）本臨時會爲進行快便起見、應推出臨時主席、庶務、文牘、會計等、即推定陳啓修先生爲臨時主席、沈士遠爲庶務、周同焯先生胡春林先生爲文牘、黃世暉先生鄭陽和先生爲會計／……」とあり、陳啓修の名が見える。また「本校出席八校教職員聯合會議新代表名單 八月三十日開票」（『北京大學日刊』第一千零七一號）（一九二二年九月二日）所載にも、「聯席會議」代表選出選挙の結果として、当選者の氏名と得票が列記され、陳啓修は七十三票で第三位。

48 「校長啓事」（『北京大學日刊』第一千零九八號）（一九二二年十一月三日）所載に拠る。十二月二日に行われた評議員選挙で、陳啓修は二十六票を得て第八位、胡適、顧孟餘、陶履恭、李大釗、朱希祖などと共に、十三名の評議員の一人に選ばれている。

49 「北大教職員臨時代表團通告」（『北京大學日刊』第一一五九號）（一九二二年一月十九日）所載に、「本校教職員輪流出席聯席會議代表之二十四人、本屆改選、業於昨日下午四時第一院開票。計投票二百三十二張、當選人名及票數如下……」

陳啓修、東京におけるその文学的営為

とあり、陳啓修は二十三票、六十一票で参加代表に選ばれている。

- 50 「本校教職員臨時委員會啓事」(『北京大學日刊』第一一六五號「一九三三年一月二十六日」所載)に、「本校自蔡校長離校後、由本校教職員全體於二十一日開大會、一致議決組織一臨時代表會、辦理挽留校長及其他一切相關事宜。本會根據大會之決議、即於當晚成立、並議定每日下午四時在第一院教務長室開會討論進行事宜。本校同人若有相商事件、請於本會開會時間、在該處與弟等接洽爲幸。／蔣夢麟(副主席) 顧孟餘 譚熙鴻 陳啓修(主席) 何基鴻 楊棟林(書記) 羅惠僑 馬裕藻 朱希祖 陶履恭 王星拱 沈兼士 沈上遠 王世杰(副主席) 黃右昌 鄭楊和 胡春林 丁燮林 徐寶璜 馬叙倫 周同焯等同啓」とある。なお、書記の楊棟林は丙辰学社の発起人の一人であり、陳啓修が丙辰学社執行部理事の際の副理事。
- 51 「校長布告」(『北京大學日刊』第二二九九號「一九三三年九月二十六日」所載)に、「法律學系政治學系補選教授會主任、已於本月二十一日舉行、選舉結果、茲公布於下：／法律學系／王世杰 三票／燕樹棠 一票／王世杰教授當選爲法律學系主任／政治學系／周覽 六票／陶孟和 一票／周覽教授當選爲政治學系主任／十二年九月二十二日」とある。
- 52 註73参照。
- 53 註91参照。
- 54 オーストリアの借款延長契約の調印に絡み、羅文幹財政總長に賄賂行為があつたとする事件。「羅文幹金佛郎案」とも呼ばれる。
- 55 事態の概要、推移に関しては、梁柱著『蔡元培與北京大學(修訂本)』(北京大學出版社、一九六六年五月)、郭廷以編著『中華民國史事日誌』(中央研究院近代史研究室、一九七九年七月)、孫常煒著『蔡子民先生元培年譜』(遠流出版事業股份有限公司、一九九七年四月)、高平叔撰著『蔡元培年譜長編』(人民教育出版社、一九九六年三月)、韓信夫等編『中華民國大事記』(中国文史出版社、一九九七年二月)、王世儒編撰『蔡元培先生年譜』(北京大學出版社、一九九八年五月)などに拠った。

56 「▲法科教員姓名及籍貫」(『北京大學日刊』第五十一號「一九一八年一月二十日」所載)に「羅文幹 廣東」の名が挙がっている。

57 「蔡元培啓事」(『北京大學日刊』第一一五九號「一九二三年一月十九日」所載)に、「元培爲保持人格起見、不能與主張干涉司法獨立蹂躪人權之教育當局、再生關係、業已呈請總統辭去國立北京大學校長之職。自本日起、不再到校辦事。特此聲明。十二年一月十七日」とある。なおこの「蔡元培啓事」は十九日から、『北京大學日刊』の第一一六一號(二月二十二日)まで、連日第一頁の冒頭に載る。

58 「北大教職員全體爲學生受傷事件宣言」(『北京大學日刊』第一一六二號「一九二三年一月二十三日」所載)に拠る。なお、この請願行動の翌々日、一月二十二日に、「北京學生聯合會」が結成され、また一月二十四日には、參議院への大規模な学生の請願行動が行われた。

59 「評議會特別會議(1923.1.18)」(『北京大學評議會會議事録』第4冊)に拠る。なお、『北京大學評議會會議事録』第4冊の内容は、李大釗研究辞典編委會編『李大釗研究辞典』(紅旗出版社、一九九四年四月)所載(同書八八四頁)に拠った。

60 「評議會布告」、『北京大學日刊』第一一五九號(一九二三年一月十九日)所載。「現本校校長以不屑與摧殘司法蹂躪人權之現教育當局共事、辭去校長職務、從本日起不到校辦事。本會同人全體、對於校長之行動、深有同感、本應隨同辭職。但因欲顧全學生之學業、本日開會議決：暫行以本會名義、會同總務長及教務長、維持本校一切事務、至教育當局問題及校長去留問題確有明白的解決之日爲止。此布。十二年一月十八日」とある。

61 同註59。

62 「北京大學全體教職員宣言」は『北京大學日刊』第一一六一號(一九二三年一月二十日)所載で、末尾に「十二年一月二十日」の記載がある。「本校教職員全體呈總統文」は『北京大學日刊』第一一六十號(一九二三年一月二十日)所載で、その末尾に「北京大學教職員代表 / 蔣夢麟、顧孟餘、譚熙鴻、陳啓修、何基鴻、楊棟林、羅惠僑、馬裕藻、朱希祖、陶履

陳啓修、東京におけるその文学的営為

恭、王星拱、沈兼士、沈士遠、王世杰、馬叙倫、黃右昌、鄭楊和、胡春林、丁燮林、等謹啓」とある。

63 前掲註46参照。

64 同註49。

65 「北京國立專門以上八校教職員代表聯席會議宣言」は『北京大學日刊』第一一六二號「一九二三年一月二十三日」所載で、末尾に「一月二十一日」の記載がある。

66 「北京國立專門以上八校教職員代表聯席會議呈府院文」、『北京大學日刊』第一一六二號「一九二三年一月二十三日」所載。

67 同註50。

68 王学珍 王效挺 黃文一 郭建榮主編『北京大學紀事(1898-1997)』(上册)「北京大學出版社、一九九八年四月」の一九二三年一月二十一日の項に「北大教職員臨時代表會議決發表宣言、并奉定代表蔣夢麟等5人于22日赴府向總統要求：(一)速批蔡校長辭呈、切實挽留；(二)罷免彭允彝；(三)批示教職員挽留蔡驅彭呈文」とあり、また一月二十三日の項には、「上午十時、教職員臨時委員會委員蔣夢麟等三人、代表全体教職員往見總統黎元洪、陳述留蔡罷彭意見、黎答、蔡先生之辭呈已批慰留；對罷彭問題、黎斷言法律上彭并未破壞司法、而教育界人却借法律問題干涉行政。并汚蔑、学界被人利用」、学不應恃衆而有越法舉」とある(同書一〇八頁)。

69 同前書『北京大學紀事(1898-1997)』(上册)に拠る、同書一一〇頁。

70 中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第十六卷(日記)「浙江教育出版社、一九九八年十一月」の一九二三年六月二十一日の項に「晨、抵家。得幼軒兩快函。得夢麟、威廉、干城、宗伯等函、知惺農、宗伯、俊甫、子均被舉爲北大教職員代表、來紹面邀回校。幼軒以葬事欲留俊甫或不來。……(中略)……惺農、子均到、寓新民旅館、知宗伯因勞頓留杭。……」(同書二百二十、二百二十一頁)とある。なお惺農は陳啓修、宗伯は楊芳、子均是段宗林、俊甫は周同焯。

71 『北京大學日刊』第一二九七號「一九二三年九月二十二日」所載の「公告」に、「政治系三年級同學公鑒／陳啟修先生行

將赴歐本班擬于本月二十三日下午二時在第二院教員休息室開送別茶話會凡我同班務請準時到會爲盼／所有費用由到會同人公攤每人約五毛請到會時一時併帶來／政治系三年級公啓」とある。

72 「陳愷農先生在政治系歡送會上的演說辭」、『北京大學日刊』第一三二一號（一九二三年十月十一日）所載。

73 「陳啓修啓事」（『北京大學日刊』第一三二二號「一九二三年十月十一日」所載）に「啓修於本月八日由北京首程赴歐、謹此通函辭行、恕不親到。」とある。なお、前掲、「四川近現代人物傳」第二輯所載の「陳豹隱」には、「陳啓修于一九二三年二月、受北京大學派遣、去歐洲視察和講學、在欧洲住了∞个月、与朱德相会于德国。」とあるが、陳啓修が北京を発ったのが、一九二三年十二月というのは誤りであろう。

74 同註72。

75 同註72。

76 「陳愷農教授自蘇俄來函」（『北京大學日刊』第一四〇九號「一九二四年三月三日」所載）は、陳啓修がモスクワ滞在中に、北京大學校長蔣夢麟、教務長顧孟餘、および大學同僚に宛てた二四年二月二日付の手紙であり、その中で彼は「啓修到莫斯科已三月、……」、「啓修擬從本月起着手於實際的參觀、於四月初離俄、經德奧瑞士赴法。」と記している。この記載からモスクワにはほぼ五ヶ月滞在したことがわかる。

77 同註72。

78 正式名称は Коммунистический университет трудящихся Востока（東方勤労者共産主義大學）、略称「КУТВ」（クートベ）。極東共和国、及びアジアの植民地、半植民地の革命幹部を養成するために、一九二一年四月、ロシアソビエト連邦社会主義共和国教育人民委員部のもとでモスクワに設置され、のちロシア共産党中央執行委員会の管轄下に、一九二一年十月に開校。モスクワに本校、タシケント、バクー、イルクーツクに分校を持ち、教育期間は三年。三〇年代末にその活動を停止した（*Большая Советская Энциклопедия 12* [издательство «Советская Энциклопедия», Москва, 1973] p573に拠る）。

陳啓修、東京におけるその文学的営為

- 79 同前、「陳愷農教授自蘇俄來函」。
- 80 同前、「陳愷農教授自蘇俄來函」。
- 81 同前、「陳愷農教授自蘇俄來函」。
- 82 羅亦農(1902-1927) 湖南省湘潭出身、二〇年上海で社会主義青年団に加入。二一年モスクワに赴き、東方大学(クートベ)に第一期生として入学、中国共産党に入党。二五年三月帰国後、中共中央駐粵臨時委員会委員、十月、広東の代表の資格で北京で開催された中央拡大会議に出席後、北京に留まり党校の活動を主宰、北方区の幹部養成を担当。中共江西省委書記、湖北省委書記、中共中央政治局委員、常務委員などを歴任。二八年四月、上海英租界で逮捕、龍華で殺害される。なお羅亦農に関して中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第八卷(陝西人民出版社、一九八三年二月)所収の劉一矛・劉景春「羅亦農」(同書七十七〜九十九頁)が詳しい。
- 83 陳啓修は、前掲「陳愷農教授自蘇俄來函」の中で、ロシアにおける新しい社会科学研究の現状と今後の展望を肯定的に記した後に、今後二、三年の露文系学生の増加、在露中国人留学生の漸次帰国、ロシア語を習得する教員の漸増などを見越して、北大でもロシア語の社会科学書を蒐集整備する必要性を説き、経済、政治、法律、史学、哲学の五系が書籍予算の中から相当額の経費を捻出して、ロシアの社会科学書の購入に充てることを、図書委員会に働きかけるよう、蔣夢麟校長、顧孟餘教務長、同僚諸氏に要請している。そして予算の支出と購入が決定されればとしながらも、陳啓修は、書籍の購入、中国への搬送などについて、モスクワでの一切の交渉を担当する者として、東方大学の学生である羅亦農と彭述之を推薦している。
- 84 前掲、「陳啓修先生致顧教務長函」(『北京大學日刊』第一七三四號「一九二五年七月六日」所載)に、「弟在外年餘、除在柏林及巴黎爲國民黨講演兩次、及在莫斯科追悼孫中山爲俄人演說一次、幾毫未作社會的活動……」とあるが、「爲國民黨」は、ベルリン、あるいはパリの、国民党在外支部のために、彼らを対象として講演を行った、という意味であろうか、それ

とも、国内の国民党に代わって、その主張を代弁して講演を行った、という意味であろうか。引用後半「モスクワでは孫中山を追悼したロシア人に講演をした」とあるので、おそらく前者の意味であろうと思われる。

85 前掲、「陳啓修先生致顧教務長函」に拠る。

86 前掲、「陳啓修先生致顧教務長函」。

87 同前、「陳啓修先生致顧教務長函」。

88 前掲、「四川近現代人物傳」第二輯所載の「陳豹隱」は、「1925年11月、他離開德國、前往蘇聯、在莫斯科東方大學學習、學習期中、參加了國民黨和共產黨。」とする。陳啓修が中共に入党した黨員であったことは事実であろう。だが、本人の証言、同時期的な周囲の者の証言、また檔案の類の客観的な資料などがなく、彼が確実に中共黨員であったことを裏付ける確証は乏しい。右の『四川近現代人物傳』第二輯所載の「陳豹隱」も、陳啓修が東方大學で学んでいる時に、国民党と共產黨に参加したと記すが、これもやはり、それを裏付ける確実な根拠は不明である。ただ、茅盾が晩年の回憶録で、陳啓修についての条りに「陳原是共產黨員」と記している（『我走過的道路』中冊、人民文學出版社、一九八四年五月〔同書二十頁〕）。一九二七年の武漢で、茅盾は『漢口民國日報』の総主筆、陳啓修は国民党機關紙『中央日報』の総編輯であって、お互いによく識る間柄であったことから、この茅盾の記載は、時を経たものと言え、陳啓修を識る者の直接の証言として、根拠を保持したものと考えることができよう。だが、入党の時期と場を特定するとすると、依然として推測に域を出ず、今後の究明に待ちたい。

89 前掲、「陳啓修先生致顧教務長函」。

90 「Massenkundgebungen in der Sowjetunion (ソ連における大衆集会)」 Moskau, den 12. Juni 1925」(『Internationale Presse-Korrespondenz』Nr.94 (一九二五年六月十六日、ウイーン発行)に拠る。

91 同註90。なお『Internationale Presse-Korrespondenz』Nr.94には、卷頭にG.Snowjew「Die welgeschichtliche Bedeutung

der Ereignisse von Schanghai (上海の諸事件の世界的意義)」と題する文章が掲載されているが、これも「五卅運動」を扱っていて内容は類似するが、モスクワでのジノールヴィエフの演説のテキストそのものではない。本文引用のジノールヴィエフ演説の翻訳部分は、前掲「Massenkundgebungen in der Sowjetunion」の「In einer Bezirksversammlung hielt Genosse Sinowjew ein Referat über die Ereignisse in China und führte aus:」以下の記載に拠った。

92 前掲、「陳啓修先生致顧教務長函」。

93 「陳啓修先生致顧教務長函」は、モスクワにあった陳啓修が、北京大学の教務長顧孟餘に宛てた、二五年六月十四日付の書信である。したがって六月中旬から二週間というところ、ぎりぎり六月末、若干遅れたとしても、二五年七月中には帰国したと考えるのが妥当であろう。

(二〇〇〇・九・六 改稿)